

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：58001

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009年～2011年

課題番号：21520043

研究課題名（和文） 道徳の規範性と技術者倫理の相補的研究

研究課題名（英文） The Mutual Study between Moral Normativity and Engineering Ethics

研究代表者

大石 敏広 (OHISHI TOSHIHIRO)

沖縄工業高等専門学校・総合科学科・准教授

研究者番号：20442494

研究成果の概要（和文）：第一に、本研究は、道徳の規範性の問題と技術者倫理の問題が相互に関連しているということを明らかにし、両者の相補的な研究を行うことによって、この二つの分野のそれぞれに問題を解決するための新しい視点をもたらすことができた。第二に、技術者倫理教育は単に知識を教えることではない。本研究は、技術者倫理の本質的な問題とは何かを明確にした。第三に、本研究は、技術者倫理の本質的な問題について技術者倫理の学習者が自ら学習するための手助けとなることができる。

研究成果の概要（英文）：First, I clarified the mutual relation between the problem of moral normativity and the problem of engineering ethics, and made mutual studies of these problems. So I suggested a new viewpoint to solve the problems of moral normativity and engineering ethics. Second, we should not pass down only knowledge when we teach engineering ethics. I clarified the essential problems of engineering ethics. Third, learners of engineering ethics can investigate the problems of engineering ethics voluntarily with the help of my study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：

1. 研究開始当初の背景

メタ倫理学の中心問題は具体的には、次の四つのテーゼによって表すことができる。

- (1) 「私が～することは正しい」といった道徳判断は、この判断を下す人にとつ

てなすべき正しい行為についての事実に関するその人の信念を表している。

- (2) ある人が、自分の行為は道徳的に正しいと判断するならば、その人はその行為をするよう動機づけられている。

(3) ある人がある行為をするよう動機づけられるのは、その人がその行為をしたいという欲求を持っているからである。

(4) 信念と欲求には必然的な結合はない。つまり、信念と欲求は別個の存在である。

上記の四つのテーゼのどれを受け入れ、どれを捨てるかに関して、これまでの研究として、次の五つの立場がある。

〈ア〉 (2) ~ (4) のテーゼを受け入れ、(1) のテーゼを捨てる (= 「内在主義的非認識説」)

〈イ〉 (1) (3) (4) のテーゼを受け入れ、(2) のテーゼを捨てる (= 「外在主義的認識説」)

〈ウ〉 (1) (2) を受け入れ、(3) (4) を捨てる (= 「内在主義的認識説」)

〈エ〉 テーゼ (1) (3) (4) と修正されたテーゼ (2) を受け入れる。テーゼ (2) を修正して、「意志の弱さ」といった非合理的なものが影響しない限りで、道徳判断は動機づけを必然的に伴っている、とする (= 「内在主義的認識説」の変種)

〈オ〉 テーゼ (3) (4) を受け入れ、テーゼ (1) (2) を捨てる (= 「外在主義的非認識説」)

〈ア〉 の立場を取る論者として、A. J. エア、C. L. スティーブソン、R. M. ヘアなどがある。この立場は、テーゼ (2) を受け入れるので、道徳判断と動機づけが必然的に結合することを主張していることになる。それゆえそれは、「内在主義」と呼ばれる。また、テーゼ (1) を捨てるわけなので、道徳判断は客観的に存在するもの (事実) についての認識ではない (「非認識説」) と主張していることになる。〈イ〉 の立場をとる論者

として、P. フット、D. ブリンクなどがある。この立場は、テーゼ (2) を捨てるので、道徳判断と動機づけの必然的結合を否定していることになる。それゆえそれは、「外在主義」と呼ばれる。また、テーゼ (1) を受け入れるのであるから、道徳判断は、事実についての客観的認識である (「認識説」) と主張していることになる。〈ウ〉 の立場を取る論者として、T. ネーゲル、J. マクダウエル、J. ダンシーなどがある。この立場は、道徳判断と動機づけの必然的結合を認め (「内在主義」)、かつ道徳判断の客観性を主張する (「認識説」)。〈エ〉 は、C・コースガードやM. スミスの立場である。これは、〈ウ〉 の修正版であり、より弱い主張である。〈オ〉 を主張する論者は、私が理解する限りでは、永井均である。ただ、彼が、この立場を、メタ倫理の中心問題に基づき系統立てて論証しているというわけではない。

本研究では、〈ア〉 〈ウ〉 〈エ〉 の「内在主義」の視点から道徳の規範性の問題に焦点を当てながら、それによって得た知見を基に技術者倫理の諸問題について論じていく。

## 2. 研究の目的

倫理学には、メタ倫理学と応用倫理学 (規範倫理学) という二つの分野がある。メタ倫理学は、倫理学において使われている言葉や概念の意味を明らかにしたり、倫理理論の基礎づけを目指す学問であると言われている。これに対して応用倫理学では、例えば「胎児の人工中絶は是か非か」といった問題が論じられるように、道徳の内容、つまり我々が道徳と考えるものはどのようなものかという問題が取り扱われる。この二つの学問は個々別々に研究されるのが常であり、二つの学が関係する形での研究はこれまであまりなされてこなかったと言える。

ところで、応用倫理学の一つである技術者倫理は、技術の発展に伴う倫理的問題（チャレンジャー号事件、雪印乳業食中毒事件等々）に対する新しいアプローチとして近年注目を集めている。しかし、まだ歴史が浅いということもあり、技術者倫理にはいくつかの錯綜した点や曖昧な点が含まれているように思われる。こうした問題点を技術者倫理の内部からだけ考察することは、根本的な解明を逸することになる可能性がある。本研究は、技術者倫理が内包する重要な問題点をメタ倫理学の視点を取り入れながら解明することを目指す。それは同時に、技術者倫理に関する考察はメタ倫理学の研究に影響を与えるはずであるから、メタ倫理学の問題についての理解を深めることにもつながる。

### 3. 研究の方法

本研究は、次の三つの要素からなる。

- (1) 「外在主義」の「内在主義」批判を考慮しつつ、「内在主義」の主要な見解の妥当性を検討することによって、道徳の規範性の概念を明らかにする。
- (2) (1)で明らかになったことを基に、技術者倫理に関する七つの主要な論点について考察する。
- (3) (2)の考察をもとに、(1)の議論に修正が必要かどうかを見定める。

研究の進め方としては、まず(1)の課題に取り組み、次に(2)の課題に進んでいくが、その際適宜(3)の課題にも平行して取り組んでいく。

### 4. 研究成果

本研究の成果は次の三点です。第一に、メタ倫理学の研究に関連するものです。本研究は、メタ倫理学という技術者倫理の外的視点から技術者倫理の問題を考察することによ

って逆に、メタ倫理学の研究に貢献するという立場に立っています。それは、メタ倫理学の問題を、応用倫理学である技術者倫理の視点から考察しなおすという立場です。応用倫理学の視点からメタ倫理学の問題を理解しようという研究もまた、これまであまり行われてこなかったと言えます。

第二に、技術者倫理の教育に関するものです。技術者倫理は生まれて間もない学問であり、さまざまな問題点を内包しています。本研究は、技術者倫理の教育に携わりながら、実は何らかの問題点を感じている先生方に、現在の技術者倫理の問題点がどこから生じてきているのか、それにはどういう意味があるのかという点について一つの明確な理解をもたらすであろうと予想されます。それによって、技術者倫理の教育が紋切り型の退屈なものになるのを防ぐことができるでしょう。

第三に、技術者倫理の学習に関するものです。上で述べたように、技術者倫理はさまざまな問題点を内包しています。技術者倫理を学習する上で、そのような問題点を避けて通るわけにはいきません。本研究は、何らかの関わりから技術者倫理を学んでいる人たちに、現在の技術者倫理が抱えている問題点について考える手助けとなることが期待できます。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

- ① 大石敏広、「技術者倫理における内部告発の問題」、日本工学教育協会編『工学教育』、査読有、58-4、2010、pp. 4-9
- ② 大石敏広、「技術者倫理において倫理学理論はどのように論じられるべきか」、日本工学教育協会編『工学教育』、査読有、58-2、2010、pp. 14-20
- ③ 大石敏広、「技術者倫理と環境問題」、日

- 本工学教育協会編『工学教育』、査読有、58-2、2010、pp. 8-13
- ④ 大石敏広、「技術者倫理における地球的視野の問題」、沖縄工業高等専門学校編『沖縄工業高等専門学校紀要』、査読有、第4号、2010、pp. 39-51
  - ⑤ 大石敏広、「技術者倫理における道徳的ジレンマと価値概念」、日本工学教育協会編『工学教育』、査読有、57-6、2009、pp. 81-86
  - ⑥ 大石敏広、「技術者倫理における設計思想について」、日本工学教育協会編『工学教育』、査読有、57-6、2009、pp. 75-80
  - ⑦ 大石敏広、「道徳的内在主義と逸脱的事例」、関西倫理学会編『倫理学研究』、査読有、第39号、2009、pp. 157-168

〔学会発表〕(計1件)

大石敏広、「工学における設計の方法と倫理学の方法論」、関西工学倫理研究会・第42回公開講演会、2011年7月9日

〔図書〕(計1件)

大石敏広、ケーエスアイ、『道徳の規範性と技術者倫理の相補的研究』、2012、130

〔その他〕(計3件)

- ① 大石敏広、「科学技術のリスクについて誰が考えるべきか」、第7回沖縄高専北部地域産学連携フォーラムにて発表、北部生涯学習推進センター、2012
- ② 大石敏広、「12.3 原発フォーラム・シンポジウム 私たちは今、何をすべきか？ 原発の本質を問う」(一般社団法人芸術文化交流アジア協会主催)にてパネリストとして参加、沖縄県立博物館・美術館、2011
- ③ 大石敏広、「科学技術と安全」、沖縄工業高等専門学校・第一回生涯学習講座にて講演、名護市立図書館、2011

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大石 敏広 (OHISHI TOSHIHIRO)

沖縄工業高等専門学校・総合科学科・准教授

研究者番号：20442494